



2014年4月15日発行（季刊）



う っ 羽 化 か

ISSN1880-8646
2014年4月
第 98 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



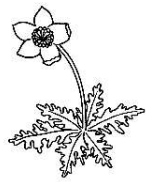
しろかピンクか桜色

目 次

漢点字の散歩（36）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（92）（山内 薫）	8
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	12
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（木下和久）	22
会員募集	23

漢点字の散歩（三十六）

岡田 健嗣



万葉集初体験（一）

本誌前号でご報告致しましたように、本会では一昨年度に引き続き昨年度も、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の第二巻を漢点字訳して、横浜市中央図書館に納入致しました。全国の図書館にお申し込みいただければ、貸し出されます。ご愛読賜りますことを願って止みません。

これまでも繰り返し申し上げて参りましたが、視覚障害者が「万葉集」に触れる機会を得られるようになったのは、今回が初めてのことです。残念ながらこのことは、ほとんど知られることがありません。「万葉集」のみならず、欧米と異なるわが国の文字言語の環境から申せば、書物に触れたことのある視覚障害者は皆無と言つてよい、と私は考えています。母国語を表記できる文字の体系を持たない者が、書物を読むということが可能かという問いを問い続けているのが、この漢点字の点訳活動だということを、再度ここに申し上げたいと思います。と申すのも、驚くべきこと

に、漢字の知識を持たない視覚障害者が、点字図書館からカナ点字で表記された点訳書や音訳書を借り受けて、触読したり聴読したりして、「本を読んでいる」と胸を張る姿に、私は屢々行き会つて参つたからに他なりません。点字書を読むという行為は、誠に労力のかかるもので、その苦勞を乗り越えて触読したのだというのが、そのような彼らの言い分だとは思われます。しかし読書が、肉体的な・精神的な苦痛に耐えることを意味しているのであればそれも許容されてしかるべきかと思われませんが、まずはそこに疑いを差し挟む必要があるはずと私には思われますし、視覚障害者の間にだけで通用する、そのような労り合いと認め合いで読書の満足を得るのかという疑いを、差し挟んでおく必要も感じております。かつての私には、このような文字を知らないことへの無自覚は、誠に信じ難いことでしたが、実際には現実には存在しており、現在も再生産され続けております。

このような情況下に、初めて本書『萬葉集釋注』に触れてみますと、誠に驚くことばかりだったと申しても過言ではありません。何に驚いたか、まだ巻二十までのうち巻第四までに触れたばかりで、今後どのような展開して行くのか想像もできませんが、ともかくこれまで読むことのできた範囲で、私にとって意外に

感じたところを、幾つか挙げてみたいと思います。これはあくまで、これまで生きてきた中で、「万葉集」について耳にしてきたことからの印象以外には、その知識を持つことがなかったという環境下でのこととお受け取りいただいて、稚拙であり取るに足りないことと思われるところもありましょうが、ご容赦いただきたくよろしくお願い申し上げます。

私が「万葉集」について抱いていたイメージと言えば、誠に漠然としたものでした。わが国最古の歌集であることと、表記されている文字が「万葉仮名」と呼ばれる、漢字音を日本語の音に当てて、カナ文字のよ用に用いたものであって、後に現在のカナ文字の基となったものであることの二点くらいのもので、この二つの点でさえ、極めて臆気な知識であつたことを、今では思い知らされております。

「万葉仮名」についてはここでは置くとして、『萬葉集釋注』に初めて触れたときの戸惑いを申しますと、何と言つても歌の並べられ方でした。

私が抱いていた最古の歌集としての「万葉集」は、当時の皇室、あるいは皇室を取り巻く人々の、宮中の冠婚葬祭の儀礼に応じて作られたお歌を、時系列に配列したものであろうというものでした。

ところが「万葉集」は、冒頭から、誠に堅固な編集意識を突きつけて参りました。長歌・短歌・旋頭歌な

ど四千五百首余りを単に時系列に並べるなどあるはずはないことは、少し考えれば当然のことではあります。が、今日まであるいは未来に至るまで何かを訴え続けるには、強烈な意識が働いていなければならぬことは、これもまた当然のことに違いありません。その編集に関する強烈な意識に思いを致すことこそが、「万葉集」に歩を踏み入れる第一歩であることが、これまた臆気ながら分かり始めました。

「万葉集」は巻一から巻二十の二十巻からなっています。それぞれの巻には、類別されてお歌が集められています。それを、「部立」と呼びます。「部立」には、「雑歌（ざふか）」（宮中の儀礼や出来事、公事に関するお歌）、「相聞歌（さうもんか）」（男女の恋愛に関するお歌、男女間で交わされたお歌）、「挽歌（ばんか）」（葬送に関するお歌、哀悼のお歌）などがあります。さらに巻三には「譬喩歌」と呼ばれる部が設けられています。これは相聞と同様に恋愛を題材にしたお歌でありながら、「相聞歌」とは呼ばれずに新たに部が立てられたお歌の集まりで、恋愛に関して直截な表現を避けているところから、平安時代の、恋愛の心を何かに仮託するという成熟したお歌に触れているような錯覚に襲われるお歌です。「万葉集」の編まれた八世紀は、わが国の言語表現の一つのピークの時期だったと言えるのでしよう。ここに収められて

いるお歌たちは、既に後世に展開される表現を先取りした作品ばかりに思われて参ります。

巻はそれぞれ部立に分けられているばかりでなく、定まった編集方針の下に編纂されているようです。そこでここでは、巻一から四の、それぞれの冒頭歌をご紹介して参ります。そしてそれぞれの理解を、伊藤先生の「釈文」から引用してみます。お歌は漢点字版の表記に倣って、漢字仮名交じり文、カナ読み、そして伊藤先生の現代語訳の順に掲げます。

（巻第一、雑歌）

一

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡
に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね そらみつ
大和の国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて
我れこそ居れ 我れこそば 告らめ 家をも名をも
こもよみこもち ふくしもよ みぶくしもち この
をかに なつますこ いへのらせ なのらさね そら
みつ やまとのくには おしなべて われこそをれ
しきなべて われこそをれ われこそば のらめ い
へをもなをも

（おお、籠（かご）、立派な籠を持って、おお、掘串（ふくし）、立派な掘串を持って、ここわたしの岡で菜を摘んでおいでの娘さん、家をおっしゃい、名前

をおっしゃいな。幸（さき）わうこの大和の国は、隈（くま）なくわたしが平らげているのだ。隅々までもこのわたしが治めているのだ。が、わたしの方からうち明けようか、家も名も。～

二

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山
登り立ち 国見をすれば 国原は けぶり立ち立つ
海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和
の国は

やまとにはむらやまあれど とりよろふ あめのかぐやま のぼりたち くにみをすれば くににはらけぶりたちたつ うなはらは かまめたちたつ うましくにぞ あきづしま やまとのくには

（大和には群がる山々があるけれども、中でもとりわけ神々しい天の香具山、この山の頂きに出で立つて国見をすると、国原にはけぶりが盛んに立ちのぼっている。海原にはかまめが盛んに飛び立っている。あ、よい国だ。蜻蛉島大和の国は。～

以下「釈文」より、第一のお歌について、

『万葉集』開卷冒頭の歌。作者は第二十一代雄略（ゆりやく）天皇。いついかなる場合でも、最初に位置するものには、それなりの意味のあるのが、世の習い。この雄略御製も、『万葉集』二十巻に対して何

らかの意味を負わされて、この位置を占めているのであろう。／ 標題に「泊瀬の朝倉の宮に云々」とある「泊瀬」は、当時隠り処（こもりく）とされ、とくに「泊瀬小国（はつせをぐに）」とも呼ばれた。また、「朝倉の宮」は、奈良県桜井市朝倉の地にあった雄略天皇の皇居。古くから今の黒崎付近がその跡とされてきたが、昭和五十九年（一九八四）六月、桜井市による諸宮調査会によって、桜井市脇本小字燈明田（とうみょうでん）の地に、南北に三列に並ぶ十三の柱穴が発掘され、この地がにわかには有力視されるに至った。脇本燈明田は、泊瀬の谷の入口、三輪山南麓、初瀬川北岸の地。／ さて、歌は、一読のもと、次のような情景を、人びとに想像させるであらう。／ 雄略天皇の支配する泊瀬小国のさる岡で、明るい春の日ざしをあびながら、入り乱れて若菜を摘む娘子（おとめ）たちの中に、とりわけ気品の高い女性がいた。身におびる籠（かご）や掘串（ふくし）の格別なさわやかさは、どこから見ても、彼女が今日の野遊びのあるじで、一族を代表して神を祭る尊い女にちがいないことを示していた。ちようどそこを通りかかったのか、それともみずからも人をひきいて国見（くにみ）にやってきたのか、雄略天皇は、いちはやくこの娘子に目をとめて呼びかけた。「籠もよ み籠持ち」。／ これから万葉四千五百余首の歌々を読み進めてゆけば、

おのずから明らかになることであるけれども、『万葉集』の名義は、諸説ある中で、おそらく、『万代集』（万世ののちまでも伝わる歌集）の意と見るのが（『万葉代匠記』）最も穏当だと思われる。その名義を象徴するかのように、『万葉集』は、うららかな春の日の、この呼びかけ歌によって幕をあける。≫

この後ろに、雄略御製歌として冒頭に掲げられたこの歌は、求婚と婚姻の成立を象徴した歌劇に基づいた、広く流布された、普遍的な形式の歌であって、それゆえにこの歌を御製として掲げたのであろう、と述べられております。言わば「万葉集」開巻の宣言としての役割を、編纂者が、この雄略御製歌に担わせたのでしょう。

第二番のお歌については、

《古代日本人が国家の意識をはっきり持ちはじめ、神々と人間との分離を知りだした第一歩は、仁徳く雄略朝あたりに求めることができる。『古事記』が、神々の物語である上巻（天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）く鵜葺草葺不合命（うがやふきあへずのみこと））、神と人との物語である中巻（神武く応神）、純粹に人間の物語である下巻（仁徳く推古）の三巻に分かれ、その下巻を仁徳天皇からはじめてい

構造を掘り上げてゆけば、右の認定がたやすく得られる。『宋書（そうしよ）』倭国伝（わこくでん）における「倭（わ）の五王」の始まりを仁徳王朝に擬する考えがあるのも、そうした探究による成果である。／仁徳朝以降、人びとの心に培われた神人分離の認識は、欽明（くしめい）推古（すいこ）六世紀後半（六二八年）、とくに推古朝に至って時期を画した。聖徳太子による冠位十二階制（六〇三年）や十七条憲法の制定（六〇四年）、大陸との正常な国交の開始（六〇七年）や仏教統制機関の設置（六二四年）などは、推古朝における国家意識の飛躍を物語る。また、天皇記・国記・本記（ほんぎ）などが編まれたこと（六二〇年）は、推古朝が古代における歴史体系の未曾有の獲得期であったことを示す。人間の個の自覚は、国家意識の生成と密接にかかわる。／抒情詩の個性は、集団を構成する人間が国家の確立による統一的な秩序や機構によつて制約を受け、一定の義務や権利を与えられて矛盾や喜びを感じる時に形成されてくるといわれる。記紀に収められる古代歌謡ならぬ万葉和歌が、推古朝を継ぐ舒明朝頃から急増し、新しい相貌を見せてくるのは偶然ではない。万葉の時代を築きあげた天智・天武両帝や持統女帝の、父であり祖父である人が舒明天皇であつたために、『万葉集』においてとりわけ舒明朝が重んぜられ

たという事情も考え合わせなければならぬものの、舒明朝あたりが万葉の黎明（れいめい）であつたことは否定できないであろう。そして、このことを身をもつてあかすのが、舒明御製の歌柄（うたがら）であり、その歌を二番歌（にばんか）として開卷冒頭歌の直後に据えた巻一の構造である。／（中略）／歌の第五句「登り立ち」は斎（い）み清（きよ）めた身を、香具山の山頂に定められた斎屋（さいおく）（いおり）の中に立てることをいうものと思われる。そのようにして、大和群山中とりわけすぐれて神聖な香具山から国見をするので、天皇の目には躍動する自然が立ちあらわれることになる。その自然、具体的にはその土と水とがともに生氣に満ちて躍っていることを述べた表現が、「国原はけぶり立ち立つ 海原はかまめ立ち立つ」の対句（ついく）である。「けぶり」は陸地一帯に燃え立つもの、水蒸気や炊煙などを称し、「かまめ」は海原に飛び交う鷗（かもめ）をいうのであるらしい。このように、国土の原核であり、農耕の必須の媒材である「土」と「水」とが充実しているというのは、国土の繁栄、一年（ひととせ）の五穀の豊穡が確約されたことを意味する。だから、一首はただちに「うまし国ぞ 蜻蛉島（あきづしま） 大和の国は」と、高らかな讃美のもとに結ばれる。／この歌

には、「大和」が冒頭と末尾とに現われるけれども、冒頭の「大和」はむしろ天皇が今在（あ）り今目にするヤマト（奈良）である。だが、「国原はけぶり立ち立つ 海原はかまめ立ち立つ」をくぐりぬけたあとの「大和」は、映像を大きく広げて、天皇の領国全体を意味するヤマト（日本）に変貌している。奈良なるヤマトには「海」がない、したがって「かまめ」が舞うのは不思議だとする視野に立つ者には、この古代特有の詩想は理解できないのではあるまいか。天皇は奈良なるヤマトの池どもを「海」と見、そこに舞い立つ白い水鳥を「かまめ」と見たのであろう。そのように思い見たからこそ、「うまし国ぞ」と称揚された末尾の「大和」は、陸と海とによって成る「日本国」全体の映像をになうことになった。まへの「大和」には枕詞がなく、あとの「大和」には枕詞「蜻蛉島」が冠せられているのも、このこととかかわりがあるう。「蜻蛉島大和の国」は日本に対する神話的呼称の一つで、五穀の豊かに稔る聖なる国の意であり、一首の文脈によく合う。》

この舒明天皇のお歌が冒頭第二番に置かれていることは、「万葉集」が舒明天皇の系統、天智・天武・持統天皇の世に始まり、営々と歌い継がれることを示唆

するものであり、そのように編纂されて行くことを意味していると言われています。そして、「雄略天皇は、『古事記』下巻の時代を代表する天子の一人で、とくに、歌の霊力によって物事のすべてを統治していく天子として名が高かった。一五三番歌において、雄略御製は、『一つ上がりたる世』を象徴する天子の歌、古き世と新しき世とのつながりをなす歌として押し立てられたとみられる。」と述べられており、「万葉集」が舒明天皇の系統、とりわけ持統天皇の歌集という性格が色濃いことを述べておられます。

この舒明天皇の国見歌に対応して、天皇の国見を褒め称えるお歌が、五二・五三番（作者未詳）で、巻第一の持統天皇の世のお歌は、ここで終わります。巻第一の後半の五四〜八四番のお歌は、元明天皇を中心とする時代に移って行きます。

五二と五三番のお歌は、「藤原の宮の御井（みゐ）の歌」と題されて、

五二

やすみしし 我ご大君 高照らす 日の御子 荒栲
の 藤井が原に 大御門 始めたまひて 埴安の 堤
の上に あり立たし 見したまへば 大和の 青香具
山は 日の経の 大き御門に 春山と 茂みさび立て

り 畝傍の この瑞山は 日の緯の 大き御門に 瑞
山と 山さびいます 耳成の 青菅山は 背面の 大
き御門に よろしなへ 神さび立てり 名ぐはし 吉
野の山は 影面の 大き御門ゆ 雲居にぞ 遠くあり
ける 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の
水こそば とこしへにあらめ 御井のま清水
やすみしし わごおほきみ たかてらす ひのみこ
あらたへの ふぢみがはらに おほみかど はじめ
たまひて はにやすの つつみのうへに ありたし
めしたまへば やまとの あをかぐやまは ひのた
ての おほきみかどに はるやまと しみさびたてり
うねびの このみづやまは ひのよこの おほきみ
かどに みづやまと やまさびいます みみなしの
あをすがやまは そともの おほきみかどに よろし
なへ かむさびたてり なぐはし よしののやまは
かげともの おほきみかどゆ くもゐにぞ とほくあ
りける たかしるや あめのみかげ あめしるや ひ
のみかげの みづこそば とこしへにあらめ みゐの
ましみづ

（あまねく天下を支配せられる我が大君、高く天上を照らしたまう日の神の御子、われらの天皇（すめらみこと）が藤井が原のこの地に大宮（おおみや）を造りになって、埴安の池の堤の上につかたと出で立つ

てご覧になると、ここ大和の青々とした香具山は、東面（ひがしおもて）の大御門（おおみかど）にいかにも春山（はるやま）らしく茂り立っている。畝傍のこの瑞々（みずみず）しい山は、西面（にしおもて）の大御門にいかにも瑞山（みずやま）らしく鎮まり立っている。耳成の青菅（あおすが）茂る清々（すがすが）しい山は、北面（きたおもて）の大御門にふさわしくも神（かん）さび立っている。名も妙（たえ）なる吉野の山は、南面（みなみおもて）の大御門のはるか向こう、雲の彼方（かなた）に連なっている。佳き山々に守られた、高く聳え立つ御殿、天（あめ）いっぱいに広がり立つ御殿、この大宮の水こそは、とこしえに尽きはすまい。ああ御井の真清水は。〜

短歌

五三

藤原の 大宮仕へ 生れ付くや をとめがともは
羨しきろかも

ふぢはらの おほみやつかへ あれつくや をとめ
がともは ともしきろかも

（藤原の大宮仕え、その仕えの者としてこの世に生まれついたおとめたち、ああ、おとめたちは羨（うらや）ましい限りだ。〜

（以下次号）

点字から識字までの距離(九二)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十)

墨田区立ひきふね図書館 山内 馨

南相馬へ(二)

いよいよ十一月二十三日「おはなし&あそび」の日、九時にホテルのロビーで待ち合わせ、Kさん、Tさん、Dさんと私の四人でタクシーに乗り、会場である原町牛越仮設住宅第二集会所に向かった。その途中でAさんの経営する酒屋さんに寄った。Aさんは酒屋の傍ら市長の秘書もなさっており、以前Kさんが南相馬を訪れた際に乗ったのがAさんの友人タクシーだった。その時の会話の中でAさんに連絡を取るから桜井市長に会うように進められて実現したのが、昨日の市長との対面だった。KさんがAさんへのお土産を渡し、私も今までの「南相馬への支援」をまとめた冊子を差し上げた。原発事故後、ほとんどの市民が緊急避難した後、多くのこそ泥が南相馬を徘徊したときに自警団を組織したという話を聞かせて下さった。Aさんから頂いた名刺には「南相馬緊急防犯パトロール隊代表」福島県警察本部長認可「一四八号」とあった。Aさんが案内して下さったお店の裏の部屋の壁には毛筆で

書かれた半紙が三枚貼られており、そこにはそれぞれ次のような言葉が記されていた。

世界史に残る、原発事故

一企業の人災事故そして、

国策だった！寒い三月でした。

私たちは忘れない、私達には、

未来があるんです。

山があっても山がない。

田畑があっても田畑がない。

川があっても川がない。

青い海があっても海がない。

生命(いのち)は、平等なんです。

くやしーです。悲しいです。

忘れません！天国の人達も

一生心のひばくです。

皆、幸福(しあわせ)にくらして

いました。

握ればこぶし

開けばてのひら

道理百遍

義理一遍

筋の通った話を百回聞かせるよりも

たつた一度の義理を尽くした

理屈抜きの民意を見せることが之を動かす

今、自分は何を考えています。

家族、放射能、将来のこと……。

この南相馬は、世界の注目を浴びています。

東電と国によっておそらく何十年も世界最大の原発

事故の三十キロに住んでいるからです。

Aさん宅を辞して、タクシーで集会所に向かった。

仮設住宅のある場所は南相馬郊外にできた南相馬ジャ
スモールというイオンスーパーセンターのすぐ隣に位
置する広域の仮設住宅だった。この牛越応急仮設住宅
は南相馬市最大の仮設住宅で、まだ建設中の仮設住宅
も含めて三百八十の住戸になる予定で、大型商業施設
の隣ということで若い人に人気のある仮設住宅だとタ
クシーの運転手が話して下さった。住宅街に入るとタ
クシー運転手の親戚の方が車に寄ってきて挨拶を交わ
していた。親戚や知り合いが多く仮設住宅で生活して
いるようだ。九時半前には第二集会所につき、生活支
援相談員のSさんにお会いした。Sさん宅もまだ放射
線量が高く、お子さんたちは福島と仙台に行って仕事
をされているということだった。三〇畳ほどの集会所
の集居室にはすでに三組の親子が待っていて下さった。

た。部屋のコーナーの白板に持参した乾千恵さんのリ
トグラフ「馬」と「月」を掲げて、十時の開始までの
時間TさんとDさんが折り紙遊びや松ぼっくりを使っ
たクリスマスツリー作りなどをして下さった。

お話し会のはじめには若いお母さんが四人、六ヶ月
の赤ちゃんを筆頭に小学校低学年の男の子が一人、学
齢前に子どもたちが六人、高齢の婦人がお二人集まっ
て下さった。

はじめに、浦和子どもの本連絡会のDさんが素話
（ストーリー・テリング）で「ひなどりとネコ」
（『子どもに聞かせる世界の民話』矢崎源九郎編、実
業の日本社、一九八八年所収）というお話をして下さ
った。そのあとお話しの舞台の背景に並べた乾千恵さ
んのリトグラフにちなんで『もと絵』（乾千恵 文
字、黒田征太郎 絵・ことば、アートン 二〇〇三
年）という絵本を読んで下さった。そのあとは私の番
で、先ず『つきのぼうや』（イブ・スパンング・オルセ
ン作・絵、やまのうち きよこ訳、福音館書店 一九七
五年）という縦長の絵本を読んだ。地上の水たまりに
映った自分を見て、友達になりたいのでその月を連れ
てくるようにとつきのぼうやを遣わすストーリーで、
空からだんだん地上に降りて最後は海の底まで降りる
途中で様々なものに出会うのだが、絵本の一部分を使

ってパタパタという昔の子どものおもちゃに仕立てたものがあるので、絵本を読んだ後それを見てもらった。

そのあとはKさんの手遊び、そして野馬追文庫のはじめの頃に送った絵本『うさぎさんてつだってほしいの』（シャーロット・ゾロトウ作、モリス・センダック絵、こだまともこ訳、富山房一九七八年）を読んだ。次は再びKさんの遊びで、新聞紙を広げてその上に乗る、じゃんけんをして負けた人はその新聞紙を半分に折ってゆく。負けると新聞紙はどんどん小さくなってその上に立っていられなくなると負けという遊びで、子どもたちは歓声を上げて楽しんでた。丁度その遊びに入る頃昨日懇親会に誘って下さった保健師のOさんが会場に来て下さり、Oさんも遊びに参加して下さった。

次は写真絵本『LOOK AGAIN!』（TAN HOBAN写真 マクミラン 一九七一年 未邦訳）で、右ページは真っ白い紙に五センチ角の四角い穴が開いていて、次ページの写真の一部分が見えるようになってる。（絵本の縦は二四センチ、横は二〇センチ、写真はすべて白黒）最初の写真はサボテンのトゲのようなものが穴から見えている。ページを開くとたんぼぼの綿毛の写真が現れる。そして次のページ

を開いた左側には男の子が口を膨らませて綿毛を飛ばしている写真が載っている。その右の四角の中には縦の縞模様、白いページを開くとシマウマの顔の写真、次のページはシマウマの全身写真……。というような構成になっているので、四角の中の部分だけ見てもらってそれが何かを子どもたちに当ててもらおうのである。中にとっても勘のいい女の子がいてかなり難しい写真も当ててくれた。

そして最後は「おはなしとあそび」のチラシに使われた『おおきなおおきなおいも』

（赤羽末吉さく
・え 福音館書店 一九七二年）の巻紙芝居。この巻紙芝居は、一九七二年一〇月にこの本が出版された直後の一二月に、図書館のクリスマス会で上



巻紙芝居

演奏するために、前の晩に一晩で作ったもので、障子紙

一卷半を使って作成した紙芝居である。この絵本は子どもが描いたような単純な黒の線描に桃色を着色した八八ページの絵本なので、何とか一晩で描き上げることができた。芋掘り遠足が雨で一週間延びることになった幼稚園の園児たちが紙をつなぎ合わせておきなおきなお芋を描くという話で、描き上げたおきなお芋の場面が延々一四ページも続く見せ場がある。この部分を実際のおきなおきな一枚の紙にできないかというのがこの巻紙芝居を作成した動機で、巻紙芝居ではこの部分が三メートルほどのおきなお芋として描かれている。この巻紙芝居は完成以来様々ところで上演されたり紹介されたりしてきた。三五年ほど前に女性雑誌の「an・an」に写真入りで紹介されることになったときに作者の赤羽末吉さんに直接電話をして著作権の許諾を頂いた。その後も様々な図書館などに貸し出しされ、その都度、紙を巻くための木の棒が付いたり、巻紙芝居を入れる箱が付いてきたりして今に至っている。巻紙芝居は紙の両端を二人の演者で持つて、一人が絵を開いていき、一人が巻き取って演じていくのである程度の練習が必要となる。今回は大阪のTさんが巻き取り役を引き受けて下さり、前日の夜に

練習をして本番に挑んだ。

お話し会終了後、生活支援指導員の方やお話し会に来て下さった高齢の女性とお話ししたが、やはり家族がばらばらになってしまっていることについて心労があると話された。その女性の家は震災後野生化した牛に荒らされたという。

仮設住宅の集会所でお昼のお弁当を頂き、Kさんはまだ行くところがあるとのこととで別行動を取り、私達はタクシーで南相馬市図書館まで帰った。大阪のTさんは飛行機で大阪に帰るため仙台行きのバスに乗り、私とDさんは一四時発の福島駅行きのバスに乗って帰途についた。福島の市内に入るとあちこちの家の屋根に何人かの白い服を着た人たちが登り、ホースで除染している姿が見られたのだった。

なお、この「おはなし&あそび」の様子が下記の二つのホームページに載っており、その時の写真を見ることができる。

はあとふる・ふくしま

<http://www.pref-f-svc.org/archives/6373>

子どもたちへ＜あしたの本＞プロジェクト

<http://www.jbby.org/ae/page/3/?lang=ja>

「東京漢点字羽化の会」第98～100回

例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



2014年1月の例会(第98回) 1月8日(水)
13…30…15…30、場所 港区ヒューマンプラザ

7階第2会議室

「補助漢点字」の墨字版を何冊かまとめて購入したので、これを、会員の何人かに持っていただくことにした。

朝日「備える歴史学」のグループ編成を決めた。

『萬葉集釋注』の巻六の校正のお礼が横浜から届いた。これからも引き続きよろしくと、岡田さんから報告があった。

入力方法について再確認の説明が岡田さんからなされた。

岡田さん作成の「エーブルディク」の使い方の説明があり、皆さんがご自分のパソコンに登録された。

1月19日に横浜で羽化の新年会が行われ、東京の会員も3人、そのほか横浜と東京の学習者も参加し和や

かな時をもてた。

2014年2月の例会(第99回) 2月19日(水)

13…30…15…30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

会員のAさんが、ご友人をこの会にお誘いくださって、初出席してくださった。そして早速今日、会員の先輩に手伝っていただいて漢点字入力のためのパソコンの下準備をなさった。

「萬葉集釈注」の校正の進捗状況を今日も確認し、岡田さんが萬葉集釋注と、これまで入力された岩波古語辞典とを、効果的かつ有効に使えることを報告し、皆様に改めて感謝なさった。

「備える歴史学」の入力のグループを決めた。

2014年4月の例会と学習会の日程をおおよそ決めた。

3月19日はIさんのご都合が悪いので、横浜での点字印刷をぜひどなたかにお願いたいので、3月の例会までにお手を挙げて下さる方がいらしたら大変ありがたいのです。よろしくお願いたします。

2014年3月の例会(第100回)、3月12日(水)

13…30…15…30 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

「備える歴史学」のグループの組み合わせをした。

岡田さんが作った講習会用漢点字テキストの第7巻の点字版を横浜で印刷してくださったので、東京では、4月の例会の日、いつもより早い時間の12時に集合して、第7巻の墨字版をできる範囲、多くの方に集まっていただいて、印刷することにした。

来月は新年度になりますので、会長さんにボランティア保険の登録をしていただくことにした。

会員をどうしたら、増員できるか、(ボランティアも学習者、いずれをも含めて)その方法を見つけたい。

3月19日の横浜での点字印刷をお二人に行っていただけになった。どうぞよろしくお願いいたします。お忙しいところをありがとうございます。

朝日備える歴史学のグループ編成を決めた。

会員のお一人が、お怪我をなさり会員一同心配している。どうぞ一日も早くお元気になって、活動に復帰していただけますように。

* 予告

2014年4月の例会(第101回)

4月9日(水) 12:00~15:30 5階印刷室

プラス ヒューマンプラザ7階第2会議室

2014年4月の学習会(第77回)

4月19日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

2014年5月の例会(第102回)

5月7日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

5月の学習会(第78回)

5月17日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

6月の例会(第103回)

6月11日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

6月の学習会(第79回)

6月21日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

わたくしと

昭和27、8年から30年代前半あたりは、ラジオからしばしば文部省唱歌が流れていた。

「春よ来い」、「春の小川」、「茶摘み」、「花火」、「紅葉」、「野菊」、「冬景色」など季節に合

わせていろいろな曲が聴けた。

童謡も、「桜ひらひら絵日傘に、チョーチョもひらひら来て遊ぶ、乳母のお郷は春霞、すみれ、たんぽぽ、レンゲ草」の『絵日傘』は優雅な美しい情景を歌いながらも、どこかに寂しげな影のある歌だった。これはメロディーから受ける印象だろうか？

「赤い鹿の子（かのこ）の帯締めて、京人形の見る夢は、汽車に揺られて東海道、眺めたあの日の富士の山」という一番の歌詞は『京人形』という歌である。

この『京人形』の歌はわたしのお気に入り、寮生活をしてたわたしが持っていた着物は、母が縫ってくれたネルの寝間着しかなかったが、就寝前のひととき、それを着て、歌の主人公、京人形に成りきって、古里の京都を後にしたころの思い出、金閣寺や東山を目に納め、かもの河原で仲良しの友達と、細石を踏みつつ、別れを惜しんだこと、汽車の窓から初めて見た富士の山のことなど、勝手な想像をしながら、歌そのものの世界に入り込んで、小さな袂を振りながら踊っていた。

学期休みに入ると、我が家でも着物を着、へこ帯を締めて、やはりこの歌を歌いながら舞い遊びをした。

なぜか童謡には寂しさ、はかなさといった影をともしなうものが多いように思う。大人は意識してか、無意識かは分らないけれど、生きてゆくには楽しいことばかりではなく、悲しさ、切なさ、辛さ、無情観も負ってゆかねばならないことを、童謡だけでなく、童話からも気づかせようとしているようだ。

童謡全盛期のこのころ、少し余裕のある家には蓄音機があつて、レコードを一枚かけるごとにぜんまいを巻いて、竹針か金属針を取り替えながら、1分間78回転のSPレコードをかけて楽しんでた。

わたしのことを自分の子供のようにかわいがってくれた近所のSおばさん一家にお呼ばれして、レコードを聞かせていただくのも、学期休みの大きな楽しみのひとつであつた。針の交換はさすがにさせてもらえなかつたけれど、だんだんぜんまい巻きをさせてもらえるようになったのも、ちよつぱり大人に成れた気分であつた。

「海は広いな大きいな、月が昇るし陽は沈む。

海は大波返す波、揺れてどこまでつづくやら。

海にお船を浮かばせて、行つてみたいなよその

国。」

の歌は世界が広がるゆつたりした大きさを感じて、こ

れも好きになった。

だが、もつと好きな歌ができた。それは

「ナイシヨ ナイシヨ ナイシヨノ オ話 アノネ
ノネ ニコニコ ニツコリ ネ、母チャン オ耳ヘ
コツソリ アノネノネ 坊ヤノ オ願イキイテヨネ」
の『ナイシヨ話』である。

この歌を歌うと、遠く離れている母が本当に直ぐそばにいる気がして、針仕事をしている母の耳元に「おかあさん」とそつと呼びかけて甘え、寂しさを紛らわせていた。

そして、あるとき、上級生のお姉さんに「わたしナイシヨ話のうた大好きよ、悲しいところがそんなにないんですもの」と言うと、その人が「本当はこの歌も悲しいのよ。まだあなたには難しいけれど、もつと大人になったら分かるわ」と、水を浴びせかけるような言葉がとんできた。ただ、救われたのは穏やかに話してくれたことだ。

しばらくの間は「なぜだろう？」と気になってはいなかったものの、誰に聞いても、知らないのか教えてくれなかった。

そのうちになにかに紛れこんでしまった。

そうして、ごく最近のこと、朝食の後片付けと夕食の下準備をしながらラジオを聞いていた。

突然わたしの心と耳を引きつける話題が飛び込んできた。

「皆さんは、ナイシヨ ナイシヨ ナイシヨノ オ話 アノネノネ、という歌を知っているでしょ。この歌の作詞者は、結城よしを（ゆうきよしお）と言つて、童謡を書くのが大好きで、手帳やノート、小さい紙の端にも書いて、数百編童謡詩を残しています。結城よしをは、昭和16年に、軍隊に招集され、19年に南方輸送船団護衛のため、ニューギニアに転進し、パラチフスに罹り、昭和19年24歳で亡くなりました。この歌は、かわいい坊やとお母さんのナイシヨ話になっていますが、もしかしたら、よしをのナイシヨ話というのは（戦争が終わるといいね）ということではなかったでしょうか」

わたしの手は止まり、水道を止めて、食卓の椅子に座り込んでしまった。

あのお姉さんが言っていたのはこのことだったのだ。それからわたしは、この話を聞かせてくれたラジオオ局に、もう少し詳しい話を知りたいと、問い合わせた。けれども結城よしを、という漢字を教えていただ

けたが、それ以上の内容は分からなかった。

そこで墨田区立八広図書館でこの歌に関するレファレンスを頼んだ。すると、合田道人（みちと）著、『こんなに深い意味だった童謡の謎3』の中に『ナイショ話』について書かれている、と教えてくださった。すぐに点字本を借りた。点字10枚程度の短いものではあったが、この中からわたしはもう一つ以前から気になっていた短歌を見つけることもできた。

結城よしを（本名、芳夫）は大正9（1920）年3月30日、山形県置賜郡宮内町（現在、南陽市）に父結城健三（歌人）、母悦子（歌人）の間に長男として生まれた。

昭和12（1937）年、17歳で東京で発行されている『詩と歌謡』や『歌謡劇場』に投稿し、地元山形新聞でも高い評価を得ていた。

昭和13（1938）年、仲間と童謡誌『お手玉』を創刊している。

『お手玉』発刊のお知らせの文章を読むと、よしをは戦争突入にさほど疑問視していないようだ。母国のため戦っている兵士を慰めるための詩を書こうと思っていた。

昭和14（1937）年19歳で『ナイショ話』が生まれた。稿料5円。この歌詞に『かわいい魚屋さん』を

ヒットさせた、よしをより19歳年上の山口保治（やすはる）が曲を付けた。『ナイショ話』の原譜に、6月6日に当時、山口が努めていた、東京京橋の京華（けいか）小学校から、小石川の自宅に帰る途中の電車の中で作曲したと記されており、同年7月にはキングレコードで吹き込まれ、10月大塚百合子という童謡歌手がレコーディングし、発売され、文部省の推薦歌にもなった。

『お手玉』発刊の前年の昭和12（1937）年12月2日付「日刊山形」に、よしをは書いている。

①「いつか、西条八十先生が（詩人は童謡を作るのが一生直らない病気だ）と言ったことをぼくは覚えています。本当にその通りだと思っています。ぼくはよい病気を持つてよかったとさえ思っております。童謡とぼくはそれは切っても切れない仲良しなんです。童謡として遊びではないのです。…」

しかし、昭和15（1940）年5月、国は戦争へと傾き、物資は不足し、雑誌を刷る紙の欠乏により『お手玉』は廃刊となった。『お手玉』はよしをの泉のようにあふれ出す詩を注ぎ込める場所であったので、なんとかしても復刊したいと願い、8ヶ月後に復刊した。けれども、よしを自身の招集により、再び廃刊せざる

をえなかった。

昭和16（1941）年7月、とうとう弘前の部隊に、野砲兵として入隊し、千島やアッツ島等の日本軍への弾丸、食料、衣料品の輸送船を護衛する船舶砲兵任務のよしをは詩を書き続けた。

昭和18（1943）年北洋から一転してシンガポールやパラオといった南の島々へ物資を輸送した。

昭和19（1944）年7月25日、任務を終えたよしをたちは九州門司港に着く。戦局の逼迫は、海上輸送を取り止めざるをえなかった。よしをたちは、巖流（がんりゅう）島で防空の任にあたる。しかし、ここで部隊はバラチフスが発生し、よしをにも伝染した。よしを以下何人かの患者は小倉陸軍病院に運ばれたが、症状は悪化の一途をたどり、重傷になった。不幸ながらも幸いなことは、故郷の父母に面会が許された。

両親は、よしをを見るなり顔を見合わせた。よしをの息は既に絶え絶えだった。

母は、病床に駆け寄った。

乳房吸う力さへなし二十五の

兵なる吾子よ 死に近き子よ

結城悦子

我が子を死出の旅に見送らなければならなかった、日本の母だけではない、戦争にかり出された世界中の、兵士の母の代表哀歌である。

昭和19（1944）年9月13日、午前7時25分、よしを24歳にて死す。

「ナイシヨ話」とは、自分と、たった一人の信頼で生きる人とのあいだから絶対に漏れてはならないことなのである。よしをにとって、それは母であつた。

遺稿童謡集『野風呂（のぶろ）』は、死の瀬戸際に、声にもならないよしをを、童謡詩をまとめて欲しいとの願いを汲んでのもので、まだ紙など手に入れるには難しいさ中の、昭和22（1947）年に発行された。

その後、読売新聞文化部発行『唱歌・童謡物語』によると、終戦後10年を経た9月のある日、東京日比谷の野外音楽堂で、物故作詞家、作曲家の合同慰霊祭が行われた。『青い目の人形』、『夕焼けこやけ』に続いて、よしをの『ナイシヨ話』が、この曲の作曲者山口保治の指揮で奏された。よしをの両親も列席していたとある。

よしをが24歳で亡くなってから、さらに24年後の1

968年によしをの遺文集『月と兵隊と童謡』が発行されている。

ここに、その遺文集から、よしをの言葉を引用する。

② へ私はしばらく月を見つめていた。すると、月が母の顔に見えてきた。母は笑っていた。私は出航前夜に、いつもするように「おかあさん」と、小声で呼んで「また征(い)って来ます。お留守をお願いします」。そう言って笑顔でお辞儀をした。私の心の中にはいつも母が住んでいてくれた」

③ へそれは、自分を慰め、励ましてくれる、闇夜の灯台のような、暖かい灯であった」

* 参考1、『こんなに深い意味だった童謡の謎3』(合田道人 祥伝社 平成14〔2002〕年11月1日初版第1刷)

(①を含む)

* 参考2、読売新聞文化部発行『唱歌・童謡物語』(1999年8月)

(②、③を含む)

* 最後に『ナイシヨ話』の歌詞全文を記させていただきます。

ナイシヨ話

結城よしを 作詞
山口保治 作曲

1.

ナイシヨ ナイシヨ
ナイシヨノ 話ハ アノネノネ
ニコニコ ニツコリ ネ、 母チャン
オ耳ヘ コツソリ アノネノネ
坊ヤノ才願イ キイテヨネ

2.

ナイシヨ ナイシヨ
ナイシヨノ 才願イ アノネノネ
アシタノ日曜 ネ、 母チャン
ホントニ イイデシヨ アノネノネ
坊ヤノ才願イ キイテヨネ

3.

ナイシヨ ナイシヨ
ナイシヨノ 話ハ アノネノネ
オ耳ヘ コツソリ ネ、 母チャン
知つテイルノハ、アノネノネ
坊ヤト 母チャン フタリダケ

2014年3月21日 (水)

漢文のペリジ

宿^ル 建 徳 江^ニ

孟浩然

移^{シテ} 舟^ヲ 泊^ス 煙 渚^ニ

日 暮 客 愁 新^{タナリ}

野 曠^{クシテ} 天 低^ク 樹^ニ

江 清^{クシテ} 月 近^シ 人^ニ

建徳江
浙江（せっこう）省
建徳市を流れる
川。今の新安江
の一部。



建徳江に宿る^{けんとくこう}

孟浩然^{もうこうねん}

船を移して 煙渚に泊す

ふねをうつして えんしよにはくす

日暮 客愁新たなり

にちぼ かくしゅうあらたなり

野曠くして 天樹に低く

のひろくして てん きにひくく

江清くして 月人に近し

こうきよくして つき ひとにちかし

煙渚 霧がかかる渚。

（煙は目に見える気体をいう）

客愁 旅にいる人のもの思い。旅愁。

参照図書 奥平卓『漢文の読みかた』

（岩波ジュニア新書）

※ 孔明の「出師の表」の続きは、

次号（七月）掲載予定です。



宿 ル 建 徳 江 ニ

孟 浩 然

移 シテ 舟 ヲ 泊 ス 煙 渚 ニ

日 暮 客 愁 新 タナリ

野 曠 クシテ 天 低 ク 樹 ニ

江 清 クシテ 月 近 シ 人 ニ



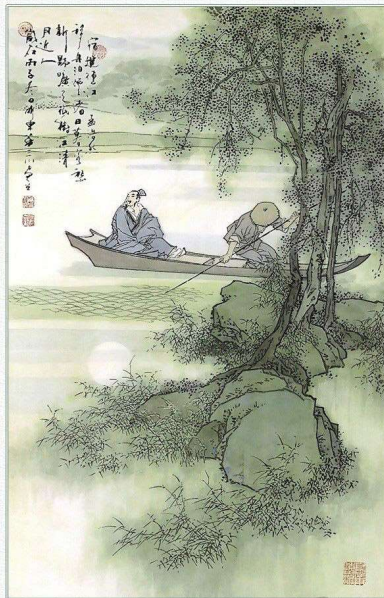
孟 浩 然

689～740年
モウ コウネン(モウ
コウゼンともいう)

盛唐の詩人。自然描写にすぐれ王維と共に「王孟」と並称される。李白や王維とも親しく交わった。「春暁」が特に有名。

華三川 唐人詩意圖

宿建德江 孟浩然
移舟泊煙渚 日暮客愁新
野曠天低樹 江清月近人



IMG 中国美術図

「報告と」案内

一 賛助会費ご納入への御礼

昨年度・2013年度も、賛助会員の皆様から会費を頂戴致しました。謹んで御礼申し上げます。
ご芳名は左の通りです。

雨宮絢子様	村田忠禱様	大滝正雄様
日本漢点字協会・川上リツエ様		
清水静雄様	田崎吾郎様	河村美智子様
木原純子様	岡 稲子様	中村裕一様
高橋かず様	北村勝三郎様	政井宗夫様
遠藤幸裕様	飯田みさ様	

誠にありがとうございます。
有効に使用させていただきます。

二 『萬葉集釋注』第二巻、漢点字訳の完成

本誌・前号でご紹介しましたように、横浜漢点字羽化の会では、昨年度も一昨年度に引き続き、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）第二巻を漢点字訳して、横浜市中央図書館に納入いたしました。漢点字

訳書の規模は、九分冊です。全国の図書館・点字図書館を通して、貸し出しを受けられます。

内容は、「萬葉集」の巻第三と第四の本文と、伊藤先生の書き下ろされた「釈文」です。伊藤先生のこの解説は、それだけでも物語性に富んでおり、研究書としてばかりでなく、一般の読者にとつての読み物としても充分耐えうるほどに、練れた、読み易い文体で綴られており、読者を魅了します。

漢点字を習得されておられる皆様、奮ってご愛読下さい。

今年度も引き続き、第三巻（「萬葉集」巻第五・第六）の完成を目指して、活動して参ります。
相変わりませぬご支援をお願い申し上げます。

三 『岩波古語辞典』

本誌でご紹介して参りましたように、東京漢点字羽化の会では、『岩波古語辞典』（大野晋・他編）の漢点字訳を進めております。

昨年はア行の完成を見ることができました。パソコンで検索して使用します。

今年度も力の項が既に完成し、利用できるような

りました。横浜で手掛けております「万葉集」を読むに当たって、そろそろ役に立つ規模に達しつつあります。現在の進行状況は、最先端が全体の半ばを見据えるところに至っております。ご期待下さい。

お使いにならたい皆様には、EIBファイルで、無料でお届け致します。ご希望をお寄せ下さい。

四 漢点字の講習会

本会では、横浜と東京で、漢点字の講習会を開催しております。視覚障害者が漢字の世界を知るには、触読文字の漢字体系であって、触読し得る唯一の点字の漢字である漢点字を習得することが必須と考えております。

本会ではオリジナルのテキストを使用して、ご自宅で漢点字を学んでいただくとともに、漢点字や漢字の知識を広げていただくことを目的に、学習会を開催しております。漢点字の学習をご希望の皆様は、お申し込み下さい。

今年度の初回は、横浜では5月25日（日）、東京では5月17日（土）です。詳細はお問い合わせください。

E-MAIL(岡田健嗣): okada_tr_eib@yhb.ne.jp

編集後記

▼今回は、「編集後記」というよりは、最近のコンピュータ周辺の現状に対する感想です▼パソコンの基本ソフトであるウィンドウズXPのサービスがとうとう終わってしまいました。世の中が進歩して、便利になるのは歓迎すべきことですが、どうしても、少数者しか利用しない特殊な分野は、置いてきぼりにされます。今はやりのスマホなどはその典型的な例でしょう。すべての操作が、画面上にタッチするだけでできるということは、晴眼者にはとても便利な機能なのでしょうが、視覚障害者にとっては大変な不便となります▼困ったことに、ウィンドウズの最新版、バージョン8は、どんなスマホ風な使い方に寄ってきているようで、ずっと従来のパソコンに慣れ親しんできたわれわれにとっては、何とも使いにくいものになってきています▼幸いにして、まだ漢点字ソフトのEIBRKWが動かないという話はないので、ほっとしていますが、次に現れる新しいウィンドウズで、これが動かなくなったら、もうお手上げです。そんなときが来ないことをただただお祈りしているばかりです。

木下 和久

会 員 募 集

横浜漢点字羽化の会

本会では、常時会員を募集しております。

活動の主な内容は、Windowsのパソコンを使用して、入力・校正を行うものです。入力は一般のワープロソフト（ワード・一太郎など）やテキストエディタを使用していただきますので、どなたでも気軽に始めることが出来ます。

最終的な目標は、漢点字（漢字を含む点字）の本を作ることです。漢点字図書の編集や作製は、オリジナルのソフトウェア・Eibrkwを使用して行い、それには若干の約束事を覚えていただかなければなりません、必要に応じてご指導いたします。

パソコンを使って、ボランティアの活動をしたいと思
いの方、是非ご連絡下さい（☎045-803-9464(木下)または
下記のEメール(岡田)へ）。

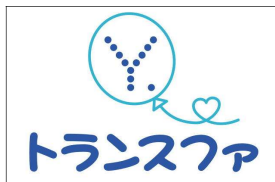


（有）横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー２級以上、および
視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL（岡田健嗣）： okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL：http://www.ukanokai-web.jp/

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌（活字版・DAISY版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。